



地域主導で実施する 学校と地域が一体になった総合防災訓練 ～青森市立東中学校区の取組～

青森市立東中学校区では、平成26年より自主防災組織のほか、PTA、民生委員、防災士、消防団、警察、赤十字救急法指導員、東中おやじの会等の地域に住む人たちが主体となり、「青森市立東中学校避難所運営委員会」を組織し、東中学校を会場に、地域住民と学校が一体になった総合防災訓練を実施しています。

訓練時の指導役は、地域のリーダーである運営委員等が担っており、教員も生徒たちと一緒に訓練に参加する事で、地域主導の学校と地域が一体になった総合防災訓練が実現されています。

また、地域住民の多様性に合わせ、年齢や性別、要配慮者などへの共助も想定し、男女共同参画の視点を踏まえた防災教育を実施しています。

災害時に避難所となる中学校の生徒と、地域の住民たちが結びつくことで、継続的な防災教育だけでなく、地域との交流を深め、互いに助け合う事や、次世代へ受け継ぐことの大切さを学んでいます。

このような学校と地域が一体となった取組が評価され、平成30年度には、学校や地域で防災教育や防災活動に取り組んでいる子どもや学生を顕彰する「1.17防災未来賞【ぼうさい甲子園】」において、フロンティア賞（過去に受賞がなかった地域・分野での先導的な取組又は初応募の優れた取組を表彰するもの）を青森県で初めて受賞しました。

さらに、令和2年度には、新型コロナウイルス感染症への対策も含めた避難所運営等の防災教育の取組が評価され、「しなやか with コロナ賞」を受賞しました。

訓練の内容

- 避難所運営
- 要配慮者への対応
- 非常食体験
(アルファ米・炊き出し)
- 福祉避難所移送手続き
- ピクトグラム作成
- ドクターヘリ救助
- ドローン飛行映像放映
など



非常食体験（アルファ米・炊き出し）



避難所設営

「釜石の奇跡」に繋がった、生徒が主役の防災教育 ～釜石市立釜石東中学校～



令和元年度 小中合同総合防災訓練

東日本大震災の大津波が東北地方沿岸部に甚大な被害を及ぼしたなか、岩手県釜石市内の児童・生徒の多くが無事でした。

この事実は、当時、『釜石の奇跡』（現在は「釜石の出来事」）と呼ばれ、大きな反響を呼んでいます。

なかでも、海からわずか500m足らずの近距離に位置しているにもかかわらず、釜石市立釜石東中学校と鵜住居（うのすまい）小学校の児童・生徒、約570名は、地震発生と同時に全員が迅速に避難し、押し寄せる津波から生き延びることができました。

釜石東中学校の生徒たちは、日頃の訓練を思い出し、避難途中で合流した小学校児童たちの手を引き、励ましながら、より遠く高いところへ避難を続けました。

その結果、積み重ねられてきた防災教育が実を結び、震災発生時に学校にいた児童・生徒全員の命を大津波から守ったのです。

三陸地方には『いのちてんでんこ』という言い伝えがあります。

「津波が来たら、家族がてんでバラバラでもとにかく逃げろ」という教訓です。根浜（ねばま）海岸のすぐ近くにある釜石東中学校の生徒にとって、地震と津波に対する防災訓練は、いつ起きてもおかしくない現実に向けた、真剣にならざるを得ない大切なものだったのです。

釜石東中と鵜住居小 児童生徒の合同総合防災訓練

学校にいる時に、三陸沖を震源とする震度6強の地震が発生し、高さ10m以上の津波が来ることを想定し、鵜住居小全校児童、釜石東中学校全校生徒を中心とし、介護施設、保護者、地域住民が合同で参加した、防災訓練を実施しました。

【訓練概要】

中学校1年生

炊き出し訓練（備蓄倉庫にあるかまどで炊飯）の後、避難してきた被災者へおにぎりを配布。

中学校2年生

キャップハンディ体験（車いす・白杖など）の後、避難者誘導（校庭から声をかけながら避難者を屋内へ誘導、けが人の介助など）。土嚢づくり（土砂災害に備えて土嚢の作り方を学ぶ）。

中学校3年生

救急法訓練（応急手当、救急搬送など）の後、避難所運営（避難者名簿作成、避難者の配置、備蓄倉庫から物資を運ぶ、マットやいすの準備など）小学校の児童達が避難者役として参加。